

# 讃岐の溜池文化と香川用水

第1回

— 溜池文化の発達史 —

長町 博 (農学博士)



## 讃岐の溜池文化

香川県では昔から「讃岐には河原はあっても河はない」と言われてきた。年間降水量が少ない上に、山が浅く平野率が高い。しかも、地形が急傾斜であるから、降った雨は一時に海へ流出してしまい、河川は表流水のない河原となって、河川利水ができなくなる。このため溜池の異常な発達をもたらした。香川県には、狭い県土に14,600余の溜池がひしめくように分布している。数の上では兵庫県の43,200余、広島県の2万余に次いで全国第3位であるが、溜池密度では全国一である。その溜池を中心とした生産活動や日々の暮らしは、「溜池文化」ともいうべき、讃岐地方独特の水の文化をもたらしている。

昔から水不足に苦しんできた讃岐平野には、潜在的な水不足に起因する水争いなど、水利をめぐる緊張関係があった。その緊張関係が、水利の仕組みや水利組合など共同体の組織を、より強固なものにしながら、何百年という長い歴史の中でそれを溜池文化にまで高め、現在に受け継がれてきている。その溜池文化が、近代的な水利システムである香川用水と一体となって、香川の水を支えているのである。ここでいう香川用水とは徳島県を流れる吉野川からの導水で、讃岐平野のほぼ全域を潤しており、昭和49年(1974)から通水を開始している。

平成6年(1994)に香川県は20世紀最大の渇水に見舞われた。しかし、溜池を中心に網の目のように張り巡らされた昔ながらの水利システムと、近代的な水利システムである香川用水が、相互に有効に機能し合っ

て的な効果を発揮し、危機を克服することができた。この溜池を中心とした旧来の水利システムの中で、渇水対策に重要な働きをしたのが「番水」である。番水は溜池ごとに仕組みられているもので、江戸時代の昔から培われ継承されてきたものである。即ち、番組に基づいて順序正しく田に配水をしていく、伝統の灌漑技法である。番水は古くは「線香水」とか「香の水」と呼ばれていたもので、時計のなかった時代に、線香や抹香の燃える長さで時間を計り、田に配水していた水利慣行の一種である。

水利慣行はその中に上流優先慣行など、不公平感の強いものがあつたりするために、悪者扱いされがちであるが、必ずしもそうではない。水利慣行は水の管理を村落共同体に委ねられていた江戸時代に、限られた水をいかに有効に、しかも合理的に利用するかのせめぎあいの中から、知恵と自治意識を働かせて編み出された規範

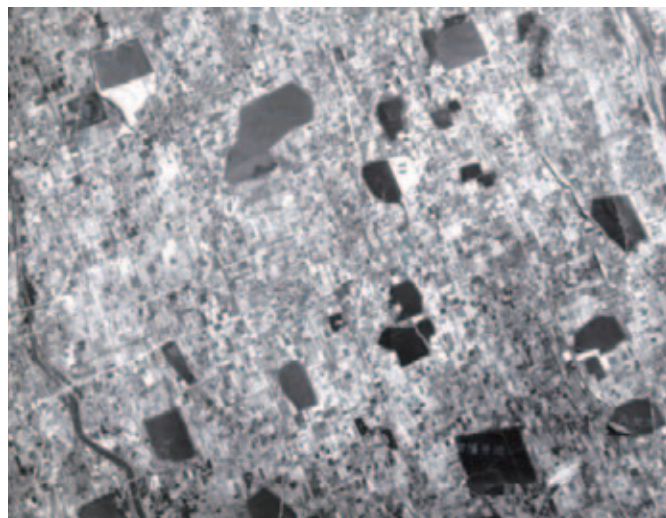


写真1 讃岐平野の溜池分布状況

である。番水はその最たるものである。

この番水は、渇水時の節水灌漑に大変な威力を発揮する。平成6年の大渇水では、農家が行った伝統の節水灌漑のお蔭で、危機に瀕している市町の上水道への救援、即ち、水融通を可能にし危機を克服することができたのである。溜池そのものは、いうまでもなく大切な水資源であり壮大な水利遺産である。同時にその溜池ごとに仕組まれている、溜められた水をどのように利用するかという、目に見えないソフト面の水利用システム、即ち、水利慣行も知られざる水利遺産であり水の文化の一つである。

一方、溜池には年間を通じて行われる管理に関わるいろいろな行事がある。これが農村での日々の暮らしに深く溶け込んでいて、そこから農村風物詩や水の歳時記が醸し出される。毎年6月15日に行われている満濃池の「初ゆる抜き」(写真2 田植えのための初放水)は、その象徴的な行事である。満濃池の初ゆる抜きを合図に、讃岐平野の田植えは一斉に本格化し、その模様が報道されて県民は夏の到来を知る。また秋の収穫後に行われる池干しによる淡水魚の収穫や、冬の乾燥期に行われる堤防の草焼きなども農村風物詩の一つである。

また、溜池には水利を通じての人と人との交わり、繋がりがあがる。それは、親池、子池、孫池といった関係から、その輪を広げながら、広い範囲でのコミュニティーとして、重要な働きをしてきている。即ち、行政サイドで組織されている集落を中心とした自治会組織と、溜池の水利を軸にしたコミュニティー、これがうまく溶け合って、いま農村地帯でだんだんに失われつつある「村機能」「集落機能」を、底辺で支え維持継承していく働きをしてきている。そのお蔭で、溜池や農道・用排水路といった農業用施設の維持管理はもとより、地域全体の環境保全に大きい働きをしてきているのである。

以上、述べてきたように、溜池を中心とした水利システム、その溜池ごとに仕組まれている水の管理に関わるノウハウ、それらを駆使して展開される生産活動や日々の暮らし、そこから醸し出されてくる農村風物詩や水の歳時記、さらにはコミュニティー、それらを総括して、これを「溜池文化」と呼んでいるのである。この溜池文化は大切に守り、次の世代へ継承していかなければならない。

以下、その溜池文化がどのように発達して来たか、

そして、現在それがどのように機能し、近代的な水利施設である香川用水とどう関わりあい、とりわけ平成6年の大渇水にどう対応したか、について記述することとする。そこで、まず溜池の発達史から入っていくこととしたい。



写真2 弘法大師ゆかりの満濃池の「初ゆる抜き」

## 古代讃岐の開拓と治水利水

農業生産にとって欠くことのできない水、それを求めて発達してきた溜池は、言うまでもなく農耕地の開拓と密接に関わっている。そこで讃岐平野の開拓の歴史を概観すると、三つの大きい開拓の時代があったことを指摘できる。その第一期は、古墳時代中後期から奈良朝末期にかけて、激しく行われた古代条里制開拓である。現在、讃岐平野の主要な部分に、条里遺構が広く分布していることが、そのことを物語っている。その後、平安から戦国時代にかけては大きい耕地の拡張は見られない。開拓の第二期は、藩政時代に入って激しく行われた新田開発である。さらに開拓の第三期は、明治以降の山麓急傾斜地の開拓を中心とした現代の開拓である。

このように讃岐平野は、三つの大きい開拓波の時代を経て現在の姿がある。このうち古代条里制開拓は、その規模が最も大きく、その後において古代の開拓を凌ぐ開拓はなかったのである。そして、溜池水利の発生は古代条里制開拓の時代にまで遡り、それが急速に発達を遂げたのは、藩政時代に入ってからである。

ここでいう古代条里制開拓とは、古代日本の土地区画制度である条里に基づく、井然とした碁盤の目地割を持った開拓を指す。「写真3 坂出市神谷平野の条里」はその一例で、千数百年の昔に遡る古代条里制開



写真3 坂出市神谷平野の条里遺構

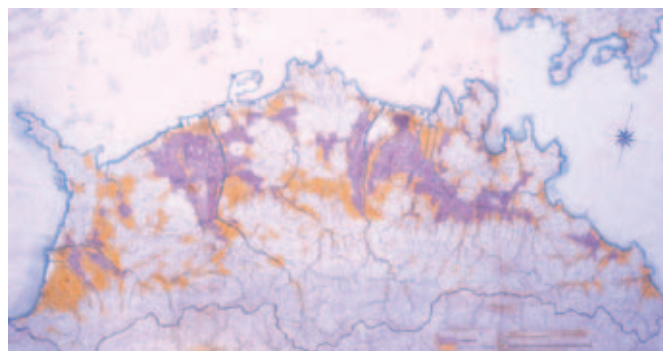
拓の遺構である。また「写真4 観音寺市の条里遺構」に示すように、耕地開拓に先立って、まず条里に基づく碁盤の目の線引きをしておいて、計画的に開拓を推し進めるのが古代条里制開拓である。こうした条里遺構の分布状況を示すのが、別掲の「讃岐平野の条里遺構分布状況」である。この地図では現在水田として開発されている地域を着色していて、朱色の部分が古代条里制開拓地域である。黄色の部分はそれ以降の時代の開拓地域であるが、そのほとんどは藩政時代の新田開発とみなされる。なお朱色の条里制開拓地域面積を計量



写真4 観音寺市の条里遺構

した結果は、22,200ヘクタールで讃岐平野の約4割を占めている。

平安時代に編纂された『和名抄』によると、讃岐国の田の面積は18,647町歩となっている。この時代の1町歩は、現在の1町2反に相当するので、現在の単位に換算すると22,400ヘクタールになる。これは現在の香川県の耕地面積の7割にも相当する大きいものである。しかも、この数字はいくつかの例証によって、奈良時代後半期から延暦時代のものとの説が有力である。一方、条里制開拓の完成期は奈良朝末期というのが定説化している。そのことからすると、讃岐平野は8世紀末には、讃岐平野の約4割、現在の耕地面積の7割にも相当する農耕地開拓を終えていて、この時代すでに確固たる農業生産基盤を築いていたと言える。



讃岐平野の条里遺構分布状況(朱色が条里遺構地域)

こうした大規模な耕地の開拓には当然のことに、開拓に先立つ河川の安定を図るための治水工事が先行し、耕地の拡張に伴い水利の開発を要請することとなる。「写真5 古代治水工事の痕跡」は、丸亀平野東部の条里遺構地域における古代治水工事の痕跡である。ここでは大東川とその支流が条里の阡陌(経緯線)に整合して、直線的に流下している。しかも、その両サイド



写真5 古代治水工事の痕跡

に千数百年を経た条里制地割が井然と遺されている。このことは、開拓に先立って条里の線引きを行い、その阡陌に沿って大東川の治水工事を先行させていたことを物語っている。即ち、古代における大東川治水工事の痕跡を示すものである。しかも、その治水工事が確かなものであったがために、河川が氾濫することなく千数百年を経て、条里制地割が現在に遺されているのである。これは一例であって、ほかの河川でも古代治水工事の痕跡を見出すことができる。

## 満濃池の創築

丸亀平野は別掲の「丸亀平野の条里復元図」に示すように、満濃池を要にして扇状に展開している。平野の約8割が条里遺構地域で、古代に一気に開発された痕跡をとどめている。丸亀平野の条里の線引きはきわめて正確で精度が高い。広大な平野に一条里の見事な線引きを行い、果敢に開拓に挑んだ古代工人たちの、気宇壮大な心意気が伝わってくるようである。

こうした大規模な開拓は、これに伴う水利の開発を要請することとなる。『日本書紀』孝徳天皇大化2年の条に「国々の堤築くべき地、溝穿るべき所、田墾るべき間は、



丸亀平野の条里復元図

本図は高重進「讃岐の条里」(広島大学文学部紀要 25-1)を基に作図したものである



写真6 弘法大師ゆかりの満濃池

均しく給いて造らしめよ」と、詔を発している。即ち、西暦646年に時の天皇は、各国々の国司に対し、治水、利水と耕地の開発を命じているのである。満濃池はこうした時代的背景のもとに、創築の機運が高まったと考えられる。満濃池は、大宝年間、西暦701年に時の国司道守<sup>あそみ</sup>朝臣によって創築されている。

「写真6」は現在の満濃池である。弘法大師ゆかりの日本一の溜池、と県民が誇りにしている溜池である。現在の満濃池は堤高32メートル、貯水量1,540万トンである。大宝年間の創築のあと弘仁12年(821)に、弘法大師によって大規模な修築が行われている。弘法大師が築いた満濃池の規模がどの程度のものであったかについて、平成5年にゼネコン大林組のプロジェクトチームが検証を行っている。それによると、堤高22メートル、貯水量500万トンと推定されている。当時としては大海原のような溜池であったに違いない。香川県には14,600余の溜池があるが、このうち河川本流を直接堰き止めた溜池は数えるほどしかない。その中であって満濃池は金倉川本流を果敢に堰き止めた本格的ダムである。9世紀初頭の技術としては、まことに卓越したものであったといわなければならない。

しかし、あまりにも大きい満濃池は、元暦元年(1184)に決壊し、その後、戦国時代を挟んで450年間もの長きにわたって廃絶したまま放置される。満濃池の再興は藩政時代に入って、寛永8年(1631)にようやく西嶋八兵衛によって行われるのである。

< 以下次号 >

## 参考文献

- 高重進：「讃岐の条里」広島大学文学部紀要 25-1 (1965)。
- 長町博：「農業基盤としての条里遺構の研究」(1991)。
- 大林組：「季刊大林 NO.40 満濃池」(1995)